

3 恋果て止めて

こい は て と め て

まにふいくみやほか **Fukapon**

既刊はウェブサイトにて無料頒布中

<http://www.projectkaigo.org/mnfikmyhk/>

「こら待てそのバカ！」

放課となれば喧噪に包まれる教室の中。

ひとときわ通る声で、森田桐子は目の前の首根っこを引っ捕らえた。

「いや、だから、本当にわかんないんだって」

捕まっってしまった穂積博徳はまたかとうんざり弱り顔。

いくら共学とは言え、男女でこうも仲がいいのは珍しい。しかしこの二人がじゃれ合っているのはさして珍しいことでもなく、周りも気にはとめていなかった。

「じゃあなんで綺月がもっと落ち込んでるのよ？」

「だあかあ、わかんねえんだって」

「綺月が一段とどんよりしたの、いつからかわかってる？」

桐子がジト目で問い詰める。

その間にも飛んでくる「お二人さん、じゃねー。また明日あ」と言った挨拶には笑顔で答えつつ、視線を戻すとまた冷たく鋭い。

「……昼休みのあと」

問い詰められる方の博徳は、すっかりまいったようでも覇気がない。

「覇気がないと明らかにわかる表情がまた、桐子に油を注いでいるようだ。」

「あのねえ、そーゆー態度はないでしょう？ 私の大切な綺月が落ち込んでるのよ？」

「いや、だから、もう何度も答えただろ？ 俺にもわからん。別にいい加減なことを言ってるんじゃないかって、本当に、わかんないんだよ。もう、勘弁してくれ」

さすがに限界といった風。捲し立てるように答えると、詰め寄

っていた桐子すら引き気味になってしまい、博徳はその隙に教室を出て行く。

つもりだったが。

「うぐぐ」

「あっ」

教室の引き戸を開けた途端、小さな少女と鉢合わせになってしまった。

「だ、大丈夫ですか？」

陸上部の優良株、鍛え上げられた肉体を有する博徳と。小さな少女がぶつかれば。

「あ、ああ、はい、大丈夫ですよ」

当然少女が――

「ごめんなさいっ、その、突然出てきたから」

ペコリと謝っていた。

「いえ、俺の方こそ、前方不注意です。済みません、笹原先輩」つまり、その場にうずくまっているのは博徳の方だった。

彼は自身の胸部を押さえながら引きつった笑顔で、目の前の少女、笹原紅深との会話を何とか紡いだ。

「ほうら見なさい、私に逆らうからそうなるのよ。って、どしたん？ これ」

博徳の後ろから現れた桐子も、状況には少々驚いた。

それはそうだろう。普通、逆。小さな紅深が飛ばされてしまうなら察しやすが、大きく屈強に見える博徳が倒れているのだから。

「その、急に出てらっしゃったのでびっくりして、こう手を伸ばしたら――」

草をして、桐子自身、剣道場へと向かった。

紅深は左手を真っ直ぐ前につきだし、続ける。
「私の、掌の、この、付け根の部分が、穂積くんの鳩尾に直撃、
してしまいました……。ごめんさい……」

「さすが紅深先輩」

「さすがなんて、言わないでください……」

幼女が大男を倒したと言える絵に、周囲も俄に盛り上がっていた。
た。

「あんなにちっちゃな身体なのに、凄いやねえ」

「頼りない佐川さんと、いい組み合わせなんじゃない？」

「やっぱ佐川さんがネコかあ」

紅深はここ最近、放課後になると決まって現れる。その目的は
みなが知ったところ。

周りの反応にあたふたする姿はきつとよく似合うのだろうが、
紅深は極めて落ち着いている。

「あの、それで、綺月さんは……？」

お決まりの科白に、目の前の二人は悲痛な表情を浮かべるほか
なかった。

「実は、もう、帰っちゃったみたいで……」

「えっ？ あ、お帰りですか……。わかりました。では、また明日」

紅深は状況を理解し、踵を返した。

「……意外と、あっさりしてるな」

未だ膝をついたまま感想を述べる博徳に、桐子は溜息を吐かざ
るを得ない。

「はあ、これだから男って動物は……。あんなにがっかりしてた
じゃない……」

小さく首を振りつつ「しっしっ、早く部活にお行き」という仕

——紅深先輩が、知らない人と、キスしていた。

目の当たりにした事実を、どう処理していいのか。佐川綺月の
頭脳は判断しかねていた。

（私を守るため、だけなの？）

先輩との時間。その意味は、一つではないだろうし、お互いに
とって異なるものでもあろう。しかし一つは、同じ意味があると
信じたかった。

（先輩は私のこと、どう思っているのかな……）

すれ違う人と何度かぶつかり「済みません」と繰り返して、答
えのない問いも繰り返して、綺月は帰りの電車へと乗り込む。

（わかるわけないんだから、考えるのはやめよう……）

目の前の空いていた座席に座り、瞼を閉じた。同時に、思考も
閉じようとした。

うまくいかない。

眠くもないため寝ることもできず、かと言って何かを考えよう
とすれば堂々巡りが再開しそう。窮した綺月は、ふと思いつく。

（そうだ、車内におもしろいことがないかを探そう）

早速きょろきょろと周りに関心事を求め、気を紛らわすことに
した。

しかし、何をしてもなく座席に座る人たち、窓の向こうでい
つも通り流れる景色。見つかったのはそれだけだった。

（あー、もうっ、何もないなら何も考えない。考えちゃダメだよ、
私、考えちゃダメ！）

そうやって何も考えぬよう努める苦痛が、二駅続いた後。ふと、

会話が聞こえた。

「ねえねえ、口移しでちょうだいよう」

「……人前でそんなことできませんよ」

「別にあなたは気になんないけどなー」

甘い声でおねだりをしているのは、綺月の斜め前に座った女性。着慣れたスーツ姿であるところを見るに、もう二十代も後半であろうか。

「ふ、普通は気にするんですっ」

一方うろたえるのは、女性の隣に座る男性。と言うよりも、男の子と言うのがふさわしいだろうか。高校の制服姿。

二人を見て、綺月はやはり考えてしまう。

(はあ、いいなあ。私も先輩と、あんなことできたらなあ)

綺月はちらちらと状況を伺いながら、己と紅深の姿を重ねている。

「気にするかなあ？」

「気にするんですっ。ミズさんは、慣れているのかも知れませんが……」

桜色の雰囲気、影が落ちた。

二人が結んでいた視線は解かれた。男の子が目を逸らし、ミズキと呼ばれた女性も正面に向き直る。

あわせて綺月も視線を戻したが、耳は引き続き、二人の声を追い続けた。

「……ねえ、こんなところでもないけどさ——」

突然トーンが変わり、落ち着いた口調になると同時に。

電車は次の停車駅に向けて、速度を落とし始める。

「確かに私は、キミよりたくさんのことを経験していると思う」

車両がプラットフォームに重なり、ついには停車。

「キミが初恋の人でもなければ、初めて付き合った人でもない——」

——プシューッ

そして電車のドアが開く。

綺月は席を立ち、電車を降りた。

(あのあと、なんて言ったのかな……)

きっと今頃、続く言葉を伝えているのだろう。再び動き出した

電車の窓越し、ポニーテールが再び横を向いた。

(紅深先輩にとっても、私は初めてじゃないんだと思う)

電車はやがて、プラットフォームから離れ、綺月には見えなくなった。

(キスしたとき、私は……。でも、先輩は、慣れているのかな)

……)

やっと改札口に向かって歩き出した彼女は、新たな思考回廊に迷い込んでいた。

§

——コンコン

——……………

——コンコンコン

——……………

(………んー、綺月、寝ちゃったのかな)

——コンコンコン

——……………

(何よ、人が珍しくノックしてやってんのに)

………
 綺月の部屋の前で、もう一呼吸待つも状況は変わらず。応答なし。

あえて静寂を保つかのような扉に、早くも彼女は痺れを切らした。

「おい、綺月いー、入るよおー」

桐子は宣言しながらレバーハンドルを押し下げ、一応そろりそろりとドアを開ける。

「はあ、部屋が真っ暗じゃ気持ちも明るくならないわよ?」

蛍光灯のスイッチを押し、部屋の中を確認した。

こんもりと布団の盛り上がったベッドを見るに、綺月はベッドでふて寝でもしているのだろう。桐子にもその原因の心当たりはなかったが、状況は予想の範疇である。

「はいはい、なんだか知らないけど、一人で落ち込んで一人で寝てるなんて寂しすぎますよー」

仕方ないわねとあっさり、彼女は綺月の布団を引っぱがした。

露わになった綺月は、制服のまま俯せに転がっている。「はああ」と一段と深い溜息をつきつつも、大きく息を吸った彼女。

「しゅんとしなさいっ!」

耳がキーンとしそうな大声を飛ばすも、対する綺月の反応はいまいち。

「……………」

無言。

けれども一拍置いて、綺月はゆっくりと起き上がり出した。それを見て安心したような笑顔で、桐子は隣に腰掛けた。

「何があったの?」

回り道をすることもなくあっさりと聞き出そうとする桐子に、少々言いくさそうではあるが、桐子に何でも話すことは、綺月にとって今まで通りの当然だった。

「あのね——」

昨日考えついでしまったこと、今日の昼休みのこと、順を追って、彼女は想いとともに説明する。

ちょこちょこ沈黙を挟みながら続けられる話を、桐子はおとなしく聞いていた。沈黙が訪れるたびに真横の綺月に視線を移すが、それでも、何も言わずに。

綺月の話が現在形にまで進んだとき、彼女は初めて、口を開いた。

「なるほどねえ」

虚空を見つめたまま、重くも軽くもない調子。その言葉は「よくわからないなあ」と言いたげな雰囲気を感じた。そして、そう実際に言ってしまうのは彼女らしい。

「私は恋愛なんてよくわからないし、先輩のこともあまり知らないんだけどさ」

話しながらベッドの端で脚をバタバタさせる。

わざとでもあり、いつもの癖でもあり。いずれにせよ、彼女の行為が、部屋の緊張感を適当なところに抑えている。

「恋って、凄いな」

「……………」

桐子は、隣の制服少女が首を少し傾げ、疑問符を頭に浮かべたことを感じ取る。経験が知っている通りの反応に、自然と言葉が続いた。

「綺月ってき、誰でもすぐに信じちゃうじゃない？」

「……そう、かな？」

「うん。信じるってより、疑わないって言うか。なのに恋をする
と、こんなに疑り深くなるんだって」

そこまで言うのと、桐子はボタンと背中から後ろに倒れ、ベッド
に身体を預ける。

言葉に不似合いな、妙に嬉しそうな笑顔の彼女。彼女を見て、
戸惑い気味の綺月。

（それってよくないこと、だよね……）

「悪いことじゃないと思うな。たくさん疑って、たくさん考えて、
それから信じる方が、強く信じられそうじゃない？」

（そっか——）

桐子の言わんとしていることに、綺月は気付いた。

その表情を仰ぎ見て、桐子は珍しく歩んだ回り道を抜ける。

「先輩から『ただ守るために一緒にいる』って言われたわけじゃ
ないんでしょ？」

「うん」

「遠くから見たら、キスしているように見えただけでも知れない
じゃない？」

「……うん」

「あ、今ちょっと迷いがあった？」

綺月の鈍い反応に、桐子はひょいっと上半身を起こすと。後ろ
からぎゅーっと、綺月を抱きかかえる。

丸みに乏しい、肉付きの薄い身体だけは、相変わらずだたと再
確認して。

「わかった、じゃあ、キスしてたかも知れない」

「えっ……」

「でもきつと、何か理由があるんだとおもうよ。例えば——」

桐子は笑顔でしゃべりながら、ぐいっと首を前に出して。

「なっ——」

真横に来た頬に口づけをした。

「もう一人の子が無理矢理したのかも知れないし？」

「なにするんだよう」

「実演だよ？ これで唇にしたら『二人はキスしてた』だよ？」

「それはそうだけど……」

「だけど？」

「別に実演しなくたって……」

目を逸らしながら、ぶくうっと頬を膨らます。

そんな綺月が可愛くてたまらない。そう思ったら、桐子は言っ
てしまう子だ。

彼女は腕を解いて、ひょいっとベッドを降りた。

「好きな人を信じ抜くって、女の子っぽくていいと思うよ？」

部屋を出て行く前に、背中を見せたまま。カラッとした声は贈
る言葉を残した。

（ありがとう、桐子）

すっかり心が軽くなった自分にふと気付くと、さっきの桐子の
ように、ボタンと後ろに倒れ込む。

お揃いのシャンプーの香りが、鼻をかすめた。

§

「おっかしいなあ、昨日は元気になったと思ったんだけどなあ」

挨拶すれば引き留められると思ったのか、「バイバイ」の一言もなく去っていった綺月を見送りながら、桐子と博徳は会談中だ。

「結局、何が原因だったんだよ？」

「んー、秘密」

博徳はヒントだけでも得られないかと、すっとぼけた顔の桐子に手持ちの数少ない情報をぶつける。

「……洋菓子美少女がパタパタと追いかけていったのと関係ある？」

「何それ？」

「さっき、エクレアが綺月を追いかけてっただろ。あのでかいリボン、気付かなかったのか？」

彼が意外に思うのも無理はない。綺月を見ていれば、嫌でも彼女が目に入る。掌二つ分はあろうかというピンクの大型リボンが、終日、綺月の隣で揺れていた。

「確かにあのリボンは目立ってたわねえ。掛け値なしの美少女、エクレアにしかできない芸当だわ。でも、追いかけてっただのは気付かなかったし、関係ない」

桐子にとっても今日の埤つらエクレアは少々気になるところであったが、綺月が紅深を待たない原因が彼女にあるわけではない。故に、その通り素っ気なく答えた。

「じゃあ、何が原因なんだよ？」

「だから、秘密だって。」

食い下がる博徳に、退ける桐子。

いつもと違い、なかなか口を割らない桐子に、博徳は今一度挑戦するが。

「おいおい、そりゃねえだろ。人を犯人扱いしといて」

「犯人じゃない。容疑者よ、容疑者」

「似たようなもんだろうが」

彼女はともも、もったいぶっているわけではない。本気で話すつもりがないらしい。

秘密の方がおもしろいと思っているのだろうか。となれば何を言おうと秘密を守る。彼とて付き合いが短いわけでもないので、よくわかっていた。

踏まえて彼は、埤があかないと判断したのだろう。不満げながらも、浅く腰掛けていた机からスッと立ち上がり、引き下がる。

「ま、いいけどさ。先輩への言い訳はお前がしろよ」

「えー、そこはヒロに頼みたいんだけど」

「やなこと」

背中に向けて「じゃあな」と右手を振りつつ、二日連続の正面衝突はなきよう気を付けながら、彼は教室を出て行った。

(……先輩が来る前に、逃げようかな)

同士のいなくなった教室でふとそんなことを思うも、残念ながら手遅れ。博徳と入れ替わるように、紅深の顔がちよこんと、廊下から覗いている。

(さすがに理由は言えないから、今日もとにかく『帰った』と言うしかないか……)

少し不安そうな表情を見るに、紅深はもう気付いているのかも知れない。

綺月を捜し続ける視線を見てやむを得ず、桐子は席を立った。

「ではみんなー、よい週末を〜!」

「じゃあねー鏡子ちゃあん」

「また来週」

また一日経ってしまった半ドンの土曜日。お昼を前にして放課後に突入した教室は、いつも以上に騒がしい。

帰途につくもの、部活に向かうもの、次々と教室を出て行く生徒たち。

その流れをつぶさに見守る瞳があった。

(休みなんか挟んだら余計こじれるわ。今日は無理にでも、一緒に帰らせるんだから)

桐子が一瞥をくると、綺月はまだ自席にいる。

「エクレア、俺じゃなくて綺月狙いなんじゃないか？」

ふと桐子の横から、博徳の声が聞こえた。彼が注目しているのは綺月の隣で今日も揺れる、大きなリボンらしい。

「まさかあ。って、あんた、よく『俺狙い』みたいなこと言えるわね」

「いや、そもそも言い出したのはお前だろ」

「まあ、そうだけどさ」

会話をしながらも、二人の視線は綺月を捉え続けている。

エクレアが何か、綺月に話しているようだ。

「今日はもう、綺月は逃げられないんだよ」

「そりゃそうよ、休みに入る前に仲直りしてもらわないと」

気合いを入れて、改めて綺月を注視する桐子。絶対に逃がさないという鋭い視線に、博徳は若干言いくさそうに続ける。

「……さっきからさ、いるんだよ。廊下に」

「ん？ 何？」

「廊下に、笹原先輩」

「……？ 何ですって!？」

彼の言葉をようやく受け入れると、桐子は跳ねるように自席

を離れ、廊下に首を出した。

「あっ——」

紅深と、目があった。

首を出した方がいいが、その後のことを考えていなかった彼女は言葉を失ってしまい、どうしたものかと思ったが。

「こんにちは。今日は、いらっしやいますか？」

次の瞬間には、紅深の方からたおやかな挨拶が聞こえた。

「え、ええ、いますよ。よかったら教室の中に」

「ありがとうございます。では、お邪魔します」

桐子が促すと、紅深は教室に入ってきた。そして真っ直ぐ、綺月へと歩む。

一方の桐子は博徳の隣に戻り、耳打ちをする。

「いつからいたのよ？」

「ホームルーム始まった直後くらいかな。ふと廊下を見たら、立ってたんだよ」

そんな話をしつつも紅深の動きを見守っていると、綺月の前で一時停止した後、くると桐子たちの方を向いて会釈した。応じて、決まり悪そうに二人とも会釈した。

「あちゃー、聞こえちゃった？」

「まさか。丁寧なだけだろ」

「ならいいけど」

再びひそひそと話し出す彼らの目には、紅深が再び前を向き、一歩、前に出る様子が映った。

大きなリボンがひょこっと動き、空いた綺月の正面には紅深が立つ。

「何言ってるのか聞こえないな」

「そこはあとで綺月を締め上げれば」

二言三言交わしたただけなのだろう。余計な詮索をする時間も与えず、綺月と紅深は一緒に、桐子たちのところへとやってきた。

「それでは、お先に失礼します」

「じゃあ、ね……」

折り目正しい紅深と、ちょっとぎこちない綺月。彼女たちは見送る二人を背に、教室を出て行った。

「めでたしめでたし、かね？」

「どうかなあ。あれはあれで、きな臭い気もするな」

あっさりとした展開でちょっと不満げな桐子に、博徳は視線を移して「あれ」を指し示す。

大きなリボンが、付んでいる。

「そりゃ考えすぎだと思うけど？ 変わり者同士、波長が合うんじゃないの？」

「変わり者って、そうしたのお前だろ？」

「そーだけどさ。別に、悪いことじゃないって」

もはや興味が失われたこの場に残るつもりはないらしく、桐子は荷物を手に、席を立った。

博徳が続いて教室を出ようとしたとき、大きなリボンはまだ、窓際にあった。

§

(つい買ってしまいましたけど、いつ、着るのでしょうか……)

日曜日の夕方。

紅深は人通りの多い街中を歩きながら、自らの行動結果に頭を

抱えていた。

(だいたい、最近の私は少し変です)

雑踏の中、時折ふらつき、小さな身体を持って行かれそうになり。それでも考えることがやめられなかった。

(平和ボケと呼ばれる現象でしょうか……。いいえ、決して平和というわけでもありません)

鋭敏な感覚を持ち合わせる彼女と言えど、考え事をしては人並みらしい。

すれ違う人と小さくぶつかるうちに、ついには。

——ポッフ

正面衝突。

「あっ、済みません——」

「ノープロブレム。しかし驚いた。かつては『辻斬り魔なる神』と恐れられたあなたも、人らしくなったもんだ」

「——っ！」

中年男性らしき声に、紅深はとっさに後ずさった。

声には全く覚えがなかったが、問題はその科白。彼女は考え事などうっっちゃり、警戒態勢を整える。

「何者だ」

男は彼女を知っているらしいが、彼女は男を知らない。

しかしその認識が変わるのに、要したのはたった一言だった。

「そう構えなさんな。——今日もあるぜ。とっておき、持って行くかい？」

「……まさかっ——」

声色を変えた科白に、紅深の記憶が蘇った。

「おーっと、こっちでは相沢英一あいきわへいちで通ってるんだ。よろしく頼む

ぜ」

「あつ、そうですよね。私も、笹原紅深です。お久しぶりです」
自己紹介しながらお久しぶりとは、端から見たらおかしな話である。しかしこの二人の関係を言い表すに、この状況は適当なものであった。

「立ち話も何だ、そこの喫茶店にでも入ろうじゃないか」

店内に入ると、運良く空いていた二人掛けの席に通された。

席に着くか着かないかで英一は適当に注文を済ませ、紅深は早速話の続きを始める。

「いつ以来でしょうか」

「どうだったかなあ。思い出せないなあ」

懐かしむように、改めて互いの容姿を観察。

思うところがあるのか、英一の方はあからさまにやついていく。

「何ですか？ 私、どこかおかしいですか？」

「いや、何だってそんな可愛い身体にしたんだい？」

「今回は、中高生と呼ばれる年代に合わせましたので。若干、成長がよくないみたいなんですけど……」

「若干どころじゃなからう。俺もこっちのことを知らないわけじゃない、それじゃあ小学生だ」

「そうなんですよね……どこかで指定を誤ったのでしょうか……」

しゅんとする紅深たちのところに、店員がやってきた。英一は「ありがとう」と言い、コーヒーと本日のケーキをテーブルに並べてもらっている。

「相変わらずですね」

「ああ、コーヒーにケーキは欠かせない」

英一は紅深に答えながらも早速フォークを手にすると、ミルクに手を付けている。

一方の紅深はコーヒーにすら口を付けることなく、少し真剣な面持ちになる。

「用件は何でしょうか」

「おいおい、久々の再会だ。本題はお茶の一杯も飲んでからにしようぜ？」

弱ったお嬢さんだとも言いたげに、コーヒーをすすると「こりゃなかなかうまい、冷める前に飲もうじゃないか」と笑って見せた。

しかし紅深はキリッと正された姿勢で、硬めの面持ちを崩そうとしない。むしろ、コーヒーが冷めることも全く気にしていない。

(この堅物度合いで、よく高校生が務まるなあ)

多少辟易としながら、やむを得ず、英一は本題に移ることとした。

「言うまでもないが、お前さんと会ったのは偶然じゃない」

「はい」

「俺のところに納品されるはずだった物が、直前で掠め取られた」

「穏やかではありませんね」

「そうなんだよ。納品前だったからこっちの責任はゼロで済んだがなあ」

責任問題になったら大変だったと、英一は大きく頭を振る。ついでにミルクに一切れを口に放り込んで、続けた。

「スナイパーライフルだ。こっちの世界のものに最新の術式が施

されている。多少の神術使いならまず外さないっつゝ売り文句に困らない逸品でな。今回値切りに値切って格安で手に入るはずだっただが……」

彼は大変に悔しいのか、それとも、ただのオーバーアクションなのか、「ガッデムー」とごつい掌を額に当て、「本当に神というヤツはろくでもない」と訴え。後ろに迷惑にならぬよう小さく、仰け反って見せた。

「事件があったことは理解しましたが、私とどのような関係があるのですか？」

「ああ、それなんだがなあ……」

英一の仕事などお構いなしに話を進めようとした紅深だったが、彼が話したがらないのでは進まない。仕方なく、と言っても、それ自体に彼女は興味がなかったのだが、目の前の皿を滑らし差し出した。

「どうぞ、私のケーキ」

「オー、マイゴッデス！ 神にもいい奴はいるもんだ」

「冗談はいりませんから」

「ふう、今時の高校生ってヤツはまじめだな。まあいい、核心だ。」

お前さんところにお人形さんが行ったろう？」

「——つ、なぜそれを？」

「驚くことはない。お代を情報でよこす奴は割と多いんだ。とにかく、そこでピンと来たね」

「……さっぱり、なんですけど」

英一は然るべきとはこのことと言わんばかりに言い切ったが、紅深には全くわからない。自身、勘が鈍いとは思っていなかったが、やはり彼には到底かなわならしい。

「いいか。悠久の時をゆるりと過ごす俺たちだ、ヤバいことなんて一年に一件がせいぜい。そりゃ冗談としても、そうそう重なるものじゃない」

ここまで言われて紅深もようやく理解したようで、少し目を見開いた。

その表情を見て、英一も満足げだ。

「そうだ。お人形さんを掠めるのも、俺の物を掠めるのも、尋常じゃない。繋がっていると考えるのが自然だろう？」

「そうですね、言われてみれば」

「つまり、用件が何か、わかるな？」

英一はそう言い放つとコーヒーカップを空にし、微笑んだ。

彼の微笑みが答えを促すものであるとは紅深にも察しが付いたが、その答えがさっぱり思いつかない。

（関係する何らかの情報が欲しいのでしょうか。しかし、私が持ち合わせている情報はほぼ皆無。英一がそれを知らないとは思えません）

彼女は彼の真意を測りかねた。何を言わせたいのだろうか。次の一言を導き出す手がかりも見つからない。

しばらく無言の時間が続くも、彼は微笑んで待っているばかりだ。痺れを切らさないのは鷹揚な彼らしい。ウエイトレスにコーヒーのおかわりを、気を利かせて二つ頼んで、悠然と待っている。

（……私が何か言わぬ限り、先には進めないようです）

引き続き頭を抱えていると、手元のコーヒーカップが取り替えられる。

温かなカップの淵に指を滑らせ、アイデアは出ぬものかと思考を続けるが、さっぱり出てこない。

（仕方ありません、ね……）

数分の沈黙の後、紅深が口を開いた。

「私だけが持っている情報はないと思います。それにもかかわらず私に接触した理由を、私には見つけることができませんと。」

若干伏し目がちながらキツパリ言い切り、向かいの様子を窺うと。

英一はコーヒークップを呷り、勢いよく、けれども全く音を立ずにソーサーに戻し。

「さすがだ、えーっと——」

「紅深です」

「ああ、さすがだ、紅深。高校生活流に言えば、赤点は免れたな」

満面の笑みで頷くと、彼は「お姉さん、レアチーズ二つ」と指で2を示し追加注文を入れ、話に戻る。

「顔を見たくなかっただけだ。今日来た理由は、それだけだ」

「……………」

「いや、そう呆れないでくれ。愛弟子が三年前に結婚してな。ちよいと相談したいことがあるってんでこっちに来たついでなんだよ」

「なんと言いましょうか、相変わらず、情に厚いご様子ですね」

「おいおい、バカにしちゃいけないぜ？ 商売するのは情を売るもんなんだよ」

皮肉も全く通じず、このタイミングでケーキを運んできたウェイトレスに彼は「なあ？ お客様の満足が第一だろう？」と同意を求める有様。

紅深は呆れて、他人のふりをしたくなった。しかし同時に、なんだかおかしくて、相変わらず憎めないなと思った。

「とは言え実は、こっち世界の相談もあってな」

彼はそう言い訳すると、再びウェイトレスに視線を移し「申し訳ない、ちよいと困らせちゃったね」と謝っている。

ウェイトレスが笑顔で立ち去るのを見届けた後、紅深はコーヒークップ片手に姿勢を直した。

「わかりました。私でわかることなら」

再び背筋を伸ばした紅深だが、表情は柔らかなさを残している。

これこそが、英一と名乗る男のやり方なのだろう。

「身体を人間に変え結婚したのはいいんだが、子どもができないらしいんだよ」

「……それは、適切に事を行っても、と言うことですか？」

「ははあ、そう表現するか。ああ、そうだ。男女の仲は良好、こっちの世界での診断によれば、不妊症ってこともないらしい」

すっかり砕けた様子でお互いにケーキをつつきながら、話し合っていた。

その内容が、小学生っぽい女の子と、中高年に属するであろう男が話すに適當かは微妙である。しかし幸い、周りは他人のことなど気にしていないようで、それぞれに笑ったり驚いたりしているようだ。

「まさか知らないんですか？」

「ん？ なんだ、本当に想いが通じない限り妊娠しないって話か？」

「ええ。やはり、知ってますよね……」

「知ってて聞いているのを、酌んでもらえんかなあ」

英一は広く深い知識と情報を持っている。それは紅深の記憶からも、今し方の会話からも明らかだった。それでもなお、知らな

いことがあるとすれば。

紅深には心当たりがあったが、答えるのに、多少ためらった。彼女の心境を英一は察しているのだろう。「コーヒーを楽しんでるから、気が向いたら話してくれ」とでも言わんばかりに、ゆったりと構えている。

彼の態度を見て紅深は、ためらおうとも結果は同じと言いたいのかと勘ぐり、話すことを決した。

「記録には残されませんが、前例はいくつかあると言われます」

「それだ。さすがは専門家」

彼女の言葉に英一は俄然身を乗り出し、コーヒーカーップをソーサーに戻した。

一方の紅深は、彼の反応に溜息を漏らしている。

「……本当にかないませんね。私は何をしているか、ご存じだったのですか」

「さもなきゃ来ないさ」

かつて交流があったとは言え、紅深は英一に素性を明かしたなどとどなかつたはずだ。それでも知っているのは、さすが英一と言うべきなのだろう。

しかし、もはや感嘆するまでもないこと。紅深は話を続けた。

「禁忌の子とされ、まず生まれぬようにされています。また方が一にも、記録、存在は残されません」

「なんてこった。こっちの世界でオルググリーンなのに孕まないってえのは、そういうことなのか」

彼は驚きを振り払うように小さく首を振る。そしてコーヒを一口飲み視線を戻したところで、紅深は話を再開した。

「神術による障害がなされており、確率は九割八分減と言ったと

ころです。二分に当たってしまった場合、本人が気付く前に処理します。どうやってかは、聞かないでください」

「結果として本人に知れず処理する方法。そんなもん古今東西一つしかないか」

「ええ。そうなつてからの処理を担当するのは、かなり上層の専門部隊です。私も、名前すら知りません。ちなみに、禁忌とされるに至った事例は口伝されています」

「何が起こつたんだ？」

「子が十を迎えた頃、我々の側に、原因不明の崩壊が相次いだそうです。直接的な関与があったという具体的な話はありませんから、私は偶然に過ぎなかった、別の要因があったのだろうと思つていますが」

紅深は求められた話を終えると、いくらか悲しそうに、伏し目がちにケーキに手を付けている。

その姿を見て無理な願いを託びるかのように、彼は礼を言った。

「そうか、ありがとな。この類の話は手に入らないんだ」

「恋愛だの、生殖だの、我々には縁のない話ですから。とは言え、私のようなものもおりますが……。何にせよ、まだ生きてらっしゃるのでしたら——」

「セックスすると言えって？ そんなこと言えるか？」

「……私から言えるのは、それだけです。特に女性になったのであれば、事態を避けられる余地はありません」

彼女の口調は淡々としていたが、表情の翳りは色濃いものとなつていた。

それに気付かぬ彼でもなかったが、思いやりなのだろう。全く気付かぬふりをした。

「冷たいなあ。とは言え、そのドライさが、上層には好評らしいぜ」
「そうなのですか？」

「ああ、かつて世話したお前さんが高評価なんだから、俺も鼻が高い。しかし、いろいろ難しいな」

「いろいろ、とは……？」

「いろいろだ。お、済まんな、時間をだいぶ取らせたようだ。と言うか、俺がヤバイ。支払いはこいつで済ませてくれ」

英一は財布から紙幣を一枚抜き取るとテーブルの上に置き、同時に席を離れた。

「あの、お釣りは——」

「お嬢ちゃんへのお小遣いだよ。じゃあな」

その行動は、緻密な計算結果だろう。金額も、渡し方も。

しかしそこまで考えているようにも見えない大雑把さで手を振りながら、身を屈めて喫茶店を出て行った。

(やはり、かないませんね)

置いていかれた一万円札を手にして、紅深は会計を済ませた。

§

「いいなあ、綺月さんは。素敵なお姉様がいる」

今日も紅深が迎えに来た綺月に、エクレアはリボンやら胸やら揺らしながら話しかけていた。

「お、お姉様って、別にそういうんじゃないくて」

エクレアにはからかっているつもりなど全くなかったが、綺月に「お姉様」の響きはこそばゆかった。

わたわたする綺月の発言に、今度は紅深が、首を傾げ反応した。

「じゃあ、私は何なのですか？」

「え、えっと……」

「お二人は『友達』って雰囲気じゃありませんよね？」

「そうでしょうか？ 先輩と後輩と言うほどの上下関係もありませんよ？」

エクレアと紅深はくって首を傾げ、じゃあ何だろうとそれぞれ自問自答している。

「友達でも先輩後輩でもなかったら……っ！ えっ、そんな、でもっ」

目の前の二人の言葉を受け取って、綺月はもっと慌てしまったようだ。

時は放課後、場所は教室。周りの目がないわけではない。こんな二人を、周りは温かく見守っていた。

「あらー、今日も始まった。あの三人、仲良いよね」

「そうねえ。しかもみんな幼く見えるから、可愛いよねえ」

女子生徒の間では下級生を、あるいは妹を見るような目で親しまれ。

「いいよなあ。俺も女だったら、あそこに混ざれたのになあ」

「綺月、リボンが曲がっていてよ？ —— あっ、紅深お姉様、ありがとございます。とかやるんかねえ。俺、佐川になりたいわ」

「お前、先輩好きなの？」

男子生徒からは、美少女のじゃれ合いとして羨望の眼差しが向けられている。

もちろん、桐子と博徳もしっかり見物していた。

「綺月と紅深先輩はつるべたなのでいいとして、なんであんな完成されちゃってるエクレアが、ピュアに見えるのかねえ」

「お前と違って変なこと考えてないからな、堤は」

「ちょ、ちょっと、なんで言い切れるのよー？ そりゃ私はいろいろ考えるけどね、女の子だったらみんな——」

「綺月、じゃあなー。明日はエプロン忘れない方がいいぞ」

「ちょ、ちょっとヒロ、あたしの話を聞きなさいよ。って、綺月っ、エプロンは私が用意するからいらないわよ！ ばっちし可愛いので決めちゃうからねっ」

本人の気持ちなどむろんお構いなしに、桐子は綺月を着せ替え人形にする気満々。

桐子の嬉々とした表情を背中で感じ、綺月は溜息をつきながら振り返った。

「うん、用意は、する……」

他方、紅深とエクレアはマイペースに話を続けている。

「エプロン？ 明日は調理実習ですか？」

「そうなんです。パウンドケーキを焼くんです」

「うわぁ、おいしそうですね。エクレアさんはお菓子作り、お得意ですか？」

「全然ダメです……。名前はエクレアなのに、さっぱり……。先輩は？」

「私もお料理は……。綺月さんはお得意だそうなので、羨ましいです」

すっかり盛り上がっている紅深とエクレアに、置いてけぼりの綺月。

再び輪の中に戻って来るも、話の流れにうまく乗れない。三人並ぶと一人だけ背の高い外見と裏腹に、彼女は三姉妹の末っ子みたいだ。

「あ、あのお、そろそろ、帰りませんか……？」

おろおろと発せられた末っ子の言葉を、姉二人が聞き逃すわけがない。

「あっ、引き留めてしまっでごめんなさい」

「ううん、私もすっかり話し込んだから。ごめんなさい、綺月さん」

「あ、そ、そんな、全然、大丈夫ですっ」

紅深はエクレアに手を振りながら、もう一方の手で綺月の手を取り歩き出す。

「それじゃあエクレアさん、また明日」

「はい、先輩っ。綺月さんもバイバイ」

「あ、うん。じゃあね、エクレアちゃん」

喧噪の中、手を繋いだ二人が教室を出て行った。

「明日の調理実習、エクレアちゃんと一緒の班なんです」

「エクレアさんはお料理が苦手なんだそうですね」

「みたいです。でも、ケーキ作りはそんなに難しくないので、大丈夫だと思います」

「そうなのですか？」

「はい、分量さえ間違えなければ大丈夫ですし、包丁はそんなに使いませんか」

「私にもできるでしょうか？」

「……あれ？ 紅深先輩も昨年作りましたよね？」

二人で歩く帰り道。

大した話をするわけではない。けれどもやはり、付き合っている浅い二人だから、驚きや発見もたくさんある。

「確かに、調理実習はありましたけど……。苦手なので、人任せにしてしまいました」

今日は知らない紅深の一面に、綺月が目を丸くしていた。

「えっ、そうなんですか？ 何でもテキパキとやっちゃうのかなあって……」

「私、そんなに凄くありませんよ？ 苦手なことはたくさんあります」

穏やかな微笑みとともに明かす紅深を見て、綺月はちょこつと、笑顔を増した。

「あっ、今笑いましたね？」

「えっ、あ、その、そうじゃなくて」

「ふふっ、いいんですよ。でもバカにされたままでは悔しいですから、綺月さんにお料理を教えて欲しいです」

おねだりを言い切る前に、紅深はぐっと、綺月の腕を引き寄せ胸の前で腕を抱きながら、にやりと上目遣いの彼女。

ちょっとだけ婀娜っぽい視線を受けて、綺月は心地よく、お姉様との関係に浸ってしまう。ちょっと慣れなくて、ぎこちなくもあるけれど。

「いつでも教えますから、その、腕を……」

「離しませんからね。だって、こうした方が温かいでしょう？」

「そ、そうですね……」

困っている綺月と、喜んでいる紅深。

こうして少しずつ大切な時間を積み重ねる、十数分間の後。二人は逆方向の電車に乗り込み、窓越しに手を振り合った。

「では、また明日」

「はい。また、明日」

程なくして、電車は未練なく逆方向に走り出す。

(あーあ、行っちゃいました)

あつという間に景色が流れる速度になった電車内で、紅深は空いている席に座った。

(調理実習かあ。今まで気にもとめませんでした。綺月さんと一緒だったら楽しいのでしょね)

綺月と一緒に料理する絵を想像して、彼女は頬をゆるめる。

(エクレアさんは一緒なんですね……)

優しく柔らかい表情に影が差す。目まぐるしく変わる表情は、彼女の気持ちそのもの。けれども彼女が己の表情を見ることができず、己の気持ちにも気付いてはいないのだろう。

(いいなあ……)

その言葉の意味が羨望だけでないことは、彼女の顔に、やはりよく表れていた。

浮き沈みすること三十分足らず。紅深は誰もいないマンションの一室に帰ると、制服のままベッドに倒れ込んだ。

(何か、落ち着きません)

ぼーっと見つめる天井は、当然変化があるわけもなく。

(なぜでしょう？ 何か、忘れているのでしょうか？)

問うても当然、天井は答えを返してくれない。

ごろんと寝返りを打ち、瞼を閉じ、視界を塞ぐ。そして自分の問いに答えた。

(いえ、私が今気を付けるべきは、綺月さんの身の安全だけ) やはり何かを忘れてはなさそうだ。

(それは問題ありません。仕掛けた監視にも何もかかっていません)

改めて心当たりを考え直すも、いよいよ落ち着かない理由が見あたらない。

ならばと彼女は一気に腕を伸ばしてベッドから起き上がり、今度は部屋を見渡した。

(特に変化は——ないわけでもありませんが)

ふと目がいったのは、ハンガーラック。そこに掛けられた、買ってしまった洋服。

(今まで何もなかった部屋ですから、あれが落ち着かない原因でしょうか)

ひょいと軽やかにベッドを降り、数歩。

試着で一度通したきりの、オールドローズの袖を手を取った。

「……着ていったら、綺月さんは喜んでくれるのでしょうか」

自分の着た姿がうまく想像できず、ラックからハンガーを抜き取り、身体にあてがう。フリルたくさんの裾を揺らしながら洗面所に向かい、鏡と向かい合った。

(ふふっ、可愛いでしょうか？ これなら綺月さんの隣を歩いてもおかしくないでしょうか？ そうだ、これを着てお料理教えてもらいに行きましょう。あ、でも、お料理するにはちょっと邪魔でしょうか？)

洋服を合わせた自分の姿は、鏡を見てもなお、しっくりと来ない。

彼女はそんな姿にすっかり夢中で、落ち着かない原因を探っていたことなど忘れてしまったようだ。しかし鏡の前の彼女は、先ほどよりもさらに、落ち着きなくあれこれ考えていた。

§

「森田桐子さん、彼女の格好は何ですか？」

放課前のホームルームのため教室にやってきた担任、荻鏡子おぎまきこは開口一番、努めて冷静に問うた。

そんな努力を全く無視するかのようになり、悪びれもせずケロリと、問われた桐子は答えている。

「彼女の格好、つてのは綺月のエプロンドレスのことでしょうか」

ちらりと視線で示した先には、教室内で一人だけ、制服姿でない彼女が座っている。

彼女は悪くない。それどころかいたたまれないので、そうっとしておいてあげたいが、首謀者がどうにも反省している様子がない。鏡子はやむを得ず、重ねて冷静さを心がけ、一言だけ注意することにした。

「わかっているなら、こういうことはやめなさいね」

「あのー、やっているのは綺月ですから、私に言われましても」

敵も然る者とも言うおうか。わざとらしく引き下がらない桐子に、鏡子はつい、冷静さを欠いてしまう。とは言え、声を荒げることはなく、むしろ力なく言い返した。

「……佐川さんに着せたのはあなたでしょうか？」

なぜなら、もうすっかり呆れているから。

「あ、鏡子ちゃんひどい。そうやって無実の生徒を……」

「はいはい、とりあえず静かに。佐川さん、ホームルームの間だけ我慢してね？」

こんな状況に、断じて許さぬとばかりに対応する教員もあるだろう。しかし、桐子と綺月の関係を考えれば、多少過ぎてはいる

一步二歩離れたところでにやにやしている。相変わらず鋭く、勸付いたらしい博徳が隣にやってきた。

「お姉様が来るまで、引き留めようって魂胆か」

「ご名答。でも、わかってて助けてあげないのは同罪よね」

呆れ顔の彼を見ることもなく、桐子はひょうひょうと言いつ返す。

「あの格好は可愛いし、先輩も喜ぶだろうからいいんじゃないか。でもなあ」

桐子は予想外の同意に驚き、博徳に顔を向けて問い返した。

「でも、何？」

「堤と抱き合ってるのはまずくないか？」

「そう？ この前も言ったけどさ、ヒロは考えすぎだと思っよ？」

「そうかねえ。俺だったら結構きついけど」

「んー、それならそれで、悪くないんじゃない？ 両面作戦って

ヤツ？」

そうして綺月のことをそれぞれに心配していると、期待通りに紅深はやってくる。

「あー」

「はいはい、綺月ですよ？ いますよいますよ、今日はとびっきりのプレゼント付きでいますよ！」

（ま、相手は一応年上なんだし、そう心配することもないか）

博徳はふっと笑みをこぼし、勢いよく迎える桐子を見ていた。

紅深にバタバタと駆け寄った桐子は、早速彼女の手を引きながら、人だかりに呪文を一つ。

「みんな道を空けてーっ。ほら、見てくださいよお、先輩」

するとモーゼの奇跡の如く、人だかりは二つに割れ、綺月への道がスパッと開けた。

「あら、まあ」

「——っ！」

驚きで目を見開く二人。

「可愛いでしょう？」

そんな驚きをにやつく桐子。

「あ、こんにちは、先輩」

マイペースのエクレア。

「帰りましょう、綺月さん」

そして、綺月と紅深を見守り周囲は静まったが、紅深の声を合図に喧噪は戻った。

「は、はいっ」

声をかけられた綺月は慌てて身を翻し、自席の鞆を取ろうとする。

しかし自由に動けず、つんのめりそうに。

それもそのはず、腰にはしっかりとエクレアがくっついていた。

「あ、あの、エクレアちゃん、離してもらっても、いいかな？」

ただでさえ恥ずかしいと思っていた格好を、紅深に見られたことで顔が真っ赤な綺月だったが、ここは落ち着いて頼んだ。頼んだと言っても、もちろん、改めてお願いするようなことでもない。

しかし返ってきた答えは、予想外だった。

「嫌です」

「……えっ？」

綺月が彼女の答えを理解するのに一瞬の遅れが生じたように、ワntenポ遅れて、周囲は再び静まった。

静まってこそいるものの、意外だという心の声が飛び交っているのは明らか。

「嫌ですって、どーゆーことだ？」

（エクレアちゃんがお姉様に宣戦布告？）

（おいおい、なんか予想外な感じだぞ）

（うあ、女同士で取り合いとかすげえな）

仕掛けた当人たる桐子も、予想外の事態に驚嘆して、相も変わらず不謹慎なことを考えている。

（ちょっとちょっと、エクレアってばなんて楽しいことを）

その彼女の隣、紅深はと言うと。確かに無言でいたが、特に変わった表情はなく、心の内は全く読めなかった。

尤も、表情に表れようと、綺月にそれを気にする余裕はなかったらう。

時計で計ればわずか数秒の長い沈黙。破ったのは、渦中のエクレアだった。

「だって先輩は、綺月さんを更衣室に連れて行くんでしょう？」

キラキラと瞳を輝かせる彼女の言葉には、全く毒気がない。

おかげで周囲の緊張も一気に解けて、元の和やかなムードが戻ってきた。

「なあんだ、そういうこと」

「確かに、制服に戻しちゃうのはもったいないよねえ」

「そうね。せっかくだから、このまま帰りなよ。いいですよね？」

先輩

桐子もいつものペースを取り戻し、満面の笑みで問うた。

「あ、はい……」

返ってきたのは予想通りの言葉と。

解けていなかった無表情だった。

「あの、紅深先輩？」

「何ですか？」

「やっぱり、こんな格好で隣を歩かれるのは、迷惑ですか？」

いつもならお揃いの笑顔で歩く帰り道。

自分の恥ずかしさに耐えるだけで精一杯だった綺月だが、もうすぐ駅に着くというあたりで、紅深の表情がいつもと違うことに気付いた。

「そんなことはありません。とっても可愛いですし……」

一方の紅深自身も、自分自身の具合がいつもと違うことには気付いていた。けれども、いつもと何が違うのか、どうしていつもと違うのか、よくわからない。だから、綺月の言わんとして、何を理解しながらも、答えようもなくお茶を濁すしかなかった。

何となく居心地の悪いまま、迎り着いた分かれ道。二人が待つプラットホームの片側に、電車が滑るように入ってきた。

降車する人が途切れると、まばらに並んでいた列が電車の中へと流れていく。

「それでは、先輩。また明日」

——トウルルルル……

発車ベルが鳴り、ドアが閉まると、ゆっくりと電車は動き出し、ついには目の前から姿を消す。

「ごめんなさい……」

紅深は表情を隠すように俯いた。そして彼女を捕まえていた手を解き、腕を下ろす。

「えっと、あの……」

ゆっくりと振り返り対峙すると、綺月は腕を伸ばし、手を繋いだ。

制服の少女と、エプロンドレスの少女と。小さく一歩ずつ歩み寄り、拳一つほどの距離で、視線を外し合う二人。

（どうしたらよいのでしょうか。私はどうして、引き留めてしまったのでしょうか）

紅深には自らを御せぬことなどなかった。それはずっと昔から。だから今この瞬間は初めての経験で、考えたこともない状況で、どうしたらいいのか、わからない。

（これって、その、もしかして……、私と……）

向かい合う綺月の頭では、憧れと現実とがぐるぐる渦巻いていた。そんなのはフィクションだからと桐子に釘を刺されていただけのシチュエーション。けれども今、現実を起こっている。どうしたらいいのか、わからない。

——間もなく二番線には……

さっきとは逆方向の入線アナウンスに背中を押され、それでも彼女は迷い、ためらった後に、その言葉を口にした。

「よかったら、私の部屋に、いらっしやいませんか」

紅深の声はか細く小さかったけれども、電車の音にかき消されることなく、綺月の元に届いた。

——プシューッ

ドアが開いたとき、綺月が顔を上げると、紅深と視線が合わさる。そして二人の表情はいつも通りに戻り。

「はい」

綺月の返事とともに、また視線を外し合った。

けれども今は、いつもよりずっと、嬉しそう。

二人は手を繋いだまま乗り込み、近くの席に座った。

「ごめんなさい。突然……」

「い、いえ、そんな」

「その、お忙しかったら、断ってくださいでも」

「大丈夫です、全然忙しくなんかありません。ホントに、全然」

「そ、そうですか。それなら、よかったです」

「はい、よかったです、はい」

ぎこちない会話を交わす二人は、周りに初々しいカップルとして映ったことだろう。たとえ女の子同士であったとしても、その雰囲気は疑いようもないものだから。

互いに話したいことはたくさんあったけれども、話せることはあまりなかった。程なくして無言になると、俯いて、手を握り合っ、俯いて。

あつという間に二つ目の駅に着こうとしたとき、紅深が言った。

「ここで、降りますから」

「はい」

綺月の小さな返事を合図に二人は立ち上がり、開いたドアの向こうへと歩んだ。

紅深にはこれが現実だとは思えず、綺月にはこれが夢の中のように思え、足下がふわふわするように感じられた。

会話らしい会話はできないままだったけれども、手を繋いだまま、すっかり暗くなった道を十数分すると。マンションの一室、紅深の部屋の目の前にまでやってきた。

「どうぞ」

「お邪魔します……」

紅深が扉を引いて促すと、綺月は玄関に入る。次いで紅深も入ると。

——ボタン

扉が閉じた。

共用廊下からの明かりが遮られ、視界は真っ暗に。

「済みません、今、明かりを点けますので」

綺月の耳元を衣擦れの音が通り抜けると、カチッとスイッチが入る音とともに周りは明るくなる。

玄関は二人が立っただけでもまだ余裕のある広さだった。

「どうぞ、お上がりください」

音につられて綺月が向けていた視線に、振り返った紅深の目が合う。

「あ、はい」

何となく気恥ずかしくなりながら綺月は廊下に行くと、くると振り返り脱いだ靴を揃えた。

追って紅深も同じように靴を並べて、綺月を案内するように奥の部屋へと向かう。

「ちょっと待ってくださいね」

そう言いながら壁面のスイッチを入れると、部屋が明るく照らされた。

「……………」

「何もなくて、驚きましたか?」

「えっ、そ、そうじゃなくて、なんて言うか、ここが紅深先輩の部屋なんだあって……………」

「はい。でも、本当に寝て起きるだけの部屋です……………」

綺月は一歩二歩と部屋の中に入り、右に左にとあちこち見回している。

そんな彼を見て、紅深はおかしそうにしていた。

「そんなに見ても、何もありませんよ?」

「ご、ごめんなさい……………あっ!」

何かを見つけて驚いたような表情の綺月に、紅深は首を傾げた。(何でしょうか。ベッド以外に何も無いと思うのですが……………)

紅深も部屋の中に入り、綺月の視線を追うと。

「あっ」

ハンガーラック。そして、掛けられた一着の洋服。

驚きの理由に気付いた紅深が部屋の中を駆け、ハンガーをひたたくと後ろ手に隠した。

「こ、これは違うんですっ!」

「そんな隠さなくても……………」

「いや、ですから、これはそのなんと申しませうか……………」

ばつが悪そうに、乾いた笑いを浮かべる紅深。

綺月はそんな彼女を初めて見た。そして初めて、意地悪してみたくなった。

「着てください」

「そ、それは……………」

「私ばかり恥ずかしいのは、ずるいです」

綺月は自らの纏う紺色のワンピースを見せ、含みのある笑みで紅深の返事待った。

「そう言われてしまいますと……………。わかりました、でも、笑わないでくださいよ?」

「それは見ながら、考えます」

「綺月さん、なんか意地悪ですよ」

早くもくすつと笑う綺月に紅深は頬を膨らませて、やっぱり、楽しそう。

後ろ手に持っていた洋服をハンガーラックに掛け直し、彼女は制服のブレザーを脱ぐ。そのままハンガーラックの上に掛け、流れるようにスカートのホックを外そうとしたとき、ふと、綺月が目に入った。

「あの、綺月さん？」

「は、はいっ」

見開いた目のまま返事をする彼女に、紅深は存外淡々と告げる。

「そんなに珍しいですか？ 着替え」

「ご、ごめんなさいっ」

慌てて後ろを向いた綺月に小首を傾げながら、紅深は制服を脱ぎ終え、件の洋服をハンガーから外す。気が進まないと思っていたが、こうして改めて手にしてみると、着てみたいなと思う。

（一緒に歩けたら、素敵かも知れません……）

スカートに脚を入れ、袖に腕を通し、背面ファスナーを上げる。

ハイウエストから上のタイトなラインに、ピシッと背の伸びる感覚が気持ちいい。

早速綺月に声を掛けようと思った紅深だが、ふと、思いついてしまった。

（せっかくだから、びつくりさせちゃいましょう）

抜き足差し足、気配を消して。紅深の得意分野だけに、丈の長いフレアスカートものともせず、衣擦れの音もなしに綺月の背後に付いた。

「綺い月さんっ！」

「ふえっ!」

思いつきりの悪戯っぽい声とともに、紅深はガバッと後ろから飛びつく。

突然背後から重み加わり、綺月はバランスを崩し。

「あっ」

——バタンッ

小さな叫びとともにフロアリングに倒れてしまった。

（……あれ？）

痛みに備え硬直した綺月の身体だったが、予想外にも柔らかなものに受け止められている。

とりあえず起き上がろうと四つん這いになり上体を浮かせながら、瞳を開くと。

（——っ!）

声も出ない。

だって、目の前にあるのは。

「ごめんなさいっ」

紅深の胸だったから。

背後にいたはずの紅深が、今は俯せになった綺月の下にいた。

「お怪我はありませんか？」

彼女は緊張のあまりに硬直する綺月を見て、動けないのは痛みのためではないかと心配して問うた。しかし反応が得られず、なお心配を深めて腕を伸ばす。

「綺月さん、そのまま力を抜いて、私に覆い被さってください」

一方の綺月は当然、力を抜くなんてできない。

（む、むりですっ、だ、だだって、そんなくみせんばいと、そんなあっ）

これ以上紅深に近づけば、何かが壊れてしまいそう。そんなぐちゃぐちゃの頭ではむろん、状況を脱する方法を冷静に考えるなどできようもない。

しかし、不慮の事故というのは起こりうる。
 綺月自身はせめて今の状態を維持しようとした。が、左手が滑った。

（あっ！）
 —フッ

（落ちるっ）

綺月は半ば無意識に慌て、再び瞳を閉じた。

しかし、紅深の胸に急降下することはなかった。彼女の顔が胸元に落ちたことは確かだったが、柔らかく触る布と、その向こうとの感触でしか感じられないほどだ。落ちた感覚がない。

「大丈夫です。今、綺月さんは、私の上に俯せになっています。骨折などの大きな怪我はしていません。だから慌てないでください」

頭上から聞こえる声は、とても優しい。

「もう少し、このままでいましょう。落ち着いたら、痛いところがないか、教えてください」
 けれども、どこか冷たい。

そんな彼女の声に綺月は落ち着きを取り戻していた。

自らの置かれた状況も理解し始めた。目の前には、ゆっくりと上下し、規則的な心音を奏でる胸があることも認識したようだ。
 （っ！こ、今度は手を滑らさないようにしなくちゃ）

綺月はどきまぎしながら、慌てず慌てて、両腕を引き寄せ上体を少し持ち上げる。

「大丈夫ですか？」

「はい……」

今度は何とか返答して、組み敷いた状態の紅深を踏んだりして

しまわぬよう、綺月は注意を払いながら四つん這いになる。

「痛いところはありますか？」

「はい、大丈夫だと思います」

「よかった……。ごめんなさい、私が驚かせたばかりに」

本当に安堵した笑みを浮かべる紅深に、綺月は少し後ろめたい。

（紅深先輩は、本気で心配してくれてたのに……。私は……）

しかし疾しさに曇らせた顔は、また紅深の心配を受けてしまう。

「……本当に、痛いところはありますか？」

「は、はい、大丈夫です」

綺月は自らに言い聞かせようと、少しでも強く答えて、ゆっくりと立ち上がる。

そして仰向けの紅深に手を差し出すつもりだったが。

「少し歩いてみてください。何か違和感があったら、教えてくださいね」

彼女は綺月に話しかけながら、ひょいと起き上がってしまった。

（え、えっと……）

出した右手をどうしたものかと思いつながら、綺月は言われた通りに、部屋の中を歩いてみた。

「大丈夫です。どこも痛くありません」

「ごめんなさい……。私が悪戯したばかりに……」

「い、いえっ、そんなっ。それに、紅深先輩が、守ってくれましたし……」

「私の身体なんか下敷きで、本当にごめんなさい」

「そ、そんなっ。それに、あの、紅深先輩のお身体は、大丈夫なんですか？」

「私は大丈夫です。綺月さんなら、いくら飛び込んでこられても

大丈夫ですよ」

綺月が無事とわかって、紅深は元気を取り戻したらしい。さっきまでの悪戯っぼさが声に乗り、「いつでもどうぞ」と言わんばかりに右手で小さく胸を叩いている。

「えっ、そんな……」

「身体が頑丈なくらいしか、取り柄がありませんから……」

未だ緊張の抜けない綺月の答えを引き金に、通じ合えない気持ちだが、紅深の顔を再び曇らせる。

しかし小さな沈黙が訪れようとする直前に、綺月の声が響いた。

「……そんなことありませんっ。先輩は優しいです、可愛いです、今、も、その……」

素っ頓狂とも言える緊張の副産物は、場を飲み込み、部屋を甘さで包んだ。

「……か、可愛い、でしょうか？」

「えと、あ、あの、はい……」

合わせてしまった視線を外すこともできず、かと言ってうまく直視もできず。

綺月を追って、紅深の頬も紅潮する。

「綺月、さん……」

「は、はい……」

「お願いが、あります……」

疑問符を浮かべ視線を合わせ直す綺月に、紅深は一步、二歩、間合いを詰める。

「抱いて、いただけませんか」

「……っ」

言葉の意味を処理した途端、綺月の思考も、身体も、停止した。

けれども目の前の世界は、動き続けている。視覚がそのことを訴えているが、やはり彼女は動けないままだった。

「私では、嫌ですか」

紅深は、顔を引き視線を外した。

やがて一音低く、放つ。

「ごめんなさい——」

ゼロ距離への小さな一步。

軽い前傾。

華奢な重みが、綺月の前身に乗った。

「少しだけ、許してください——」

すうっと互いの服が重なる音を奏でる中、紅深の両腕は綺月の背後へ。

上向けた紅深の顔はうっすらと微笑み、幸福にも、悲痛にも見えた。

「綺月さんにもギュッとして欲しかったんですけど、それは、欲張りですよな」

笑顔のバランスが崩れ、涙を見せそうにすらなったそのとき。

綺月の思考は回復した。

(あっ、そういう——)

綺月は勘違いに気付いて、それがあまりに恥ずかしくて、大慌てで、つい。

「——あっ」

紅深は突然強く抱き寄せられ、目を見開き。同時にあられもない声で驚きを漏らしてしまう。

「……」

どれほどそうしていたのだろう。彼女たちの感覚では数分、あ

るいはそれ以上であったかも知れない。

少しずつ、腕の力を抜いて。

向かい合う瞳に、話せるだけの余裕を確認し合つて。

ほんのり笑う紅深が、その意味を言葉にする。

「とても、嬉しいです」

「……私も、です」

「エクレアさんに行っているのを見て、羨ましいなって思いました」

「あっ——」

紅深の言葉にまたもや慌てた綺月が、今度は紅深から離れようとしてしまう。

けれども紅深は、強く彼女を繋ぎ止めたまま。

「わかっています。綺月さんにとっては恥ずかしいんだろうなつて。でも、どうしてもして欲しかったんです」

そう言い終えると、滑らせるように腕を解き、小さく一歩、綺月から離れた。

「綺月さんを困らせてはいけないとも思いました、けど……」

綺月は腕をぶらんと下げて、あっけにとられた様子でいる。

紅深の声は、綺月に聞こえているのだろうか。紅深にもわからなかったが、己の制御を失った彼女に、声を止めることはできなかった。

「ごめんなさい。でも、それでも、私は……。変ですわね、私。どうしてしまったのでしょうか」

紅深の笑顔に差した自嘲気味の影が、綺月の口を開かせた。

「ごめんなさい——」

「えっ？」

なぜか謝られた紅深は、小さく目を見開く。

「もう、あんなことしません。ごめんなさい」

「どうしてですか。どうして綺月さんが謝るのですか」

紅深にはもう、わからないことだらけだ。だから他意なく、質問した。

しかし今の綺月に、それだけのことを理解できようはずもなく。だから綺月は、自らが受け取った意味で素直に答える。

「だって、その、紅深先輩以外とは、しちゃいけないから……」

「そんなことありません。けれども、私にも、して、ください……」

二人の気持ちは少しずれ違っているのかも知れない。しかしお互いの素直さが功を奏してか、穏やかな笑顔を交わすに収まった。

そして早くも落ち着きを取り戻した紅深は、小さく手を差し出した。

「手、繋ぎませんか」

綺月はまた少し慌てながらも、今度は腕を動かさせた。

「……はい」

「私、好きです」

「——っ！」

「こうして手を繋いでいると、なんだか楽しいんです」

「……私も、です」

二人のすれ違いは、もう少し続きそう。

手を繋いだまま、寄りかかり合いながら。

何を話すでもなく、心地よい状態に身を任せ。

このまま一晚を過ごしかねない雰囲気。しかし数分もせず、状況の終わりを強いる音が響いた。

——ブーン、ブーン……

静かな室内に響くバイブレータの音。

二人が音のする方を見ると、ハンガーラックの横。

「あ、ごめんなさい。私の携帯です」

綺月は立ち上がり、鞆から携帯を取り出す。そして「森田桐子」と表示する電話機を開くと、すぐさま、大きな声が飛んできた。

「——綺月いっ、どこほっつき歩ってんのよ！ 今日の夕食当番はあんたでしょうが。早く帰ってきなさい！」

「えと、あの、その……」

「それと、そこに紅深先輩いる？」

「う、うん、いるよ」

「はいはい、替わって替わって」

「え、あ、うん、ちょっと待って」

紅深と一緒にいると知れていることに疑問を持たせない。そのための勢いと流れに圧倒され、綺月はあっさりと、紅深に電話機を渡した。

「桐子からなんですけど、先輩に替わって欲しいそうです」

「私ですか？ それでは、失礼します」

紅深は頭を少し傾げて、電話機を髪と首の間に通した。

「替わりました、笹原です」

「あ、紅深先輩。私、私ですー、桐子ですー」

「はい、桐子さん。こんばんは」

桐子同様、紅深はいつも通り。

一方、綺月は隣で気が気でない様子。二人がいつも通りなのが、ついさっきまでの状況を考えると余計に心配だ。

(いったい何の用なんだろう……)

勢いに押し切られ替わってしまったが、桐子が何を聞くかも、紅深が何を言ってしまうかも、今改めて考えると不安でならない。そんな彼女の心中を察することもなく、二人の会話は続いている。

「今、どこにいるんですか？」

「私の部屋です」

(あつ、そ、それ言っちゃっ……)

「あらま。何してたんですかあ？」

「手を繋いでました」

桐子の声がよく聞こえないとは言え、次にどんな問答がなされるかは察するに容易い。予想通りの展開を阻止すべく、綺月はあらん限りの力で受話器を掠めた。

「済みません紅深先輩っ電話貸してくださいっ」

「えっ？」

驚きながらも引き渡す紅深から受話器をひったくると、綺月は捲し立てる。

「なんでもないからっ、夕飯でしょ？ 今すぐ帰るからっ。じゃあねっ」

——ボタンッ

そのまま流れ作業で電話機を二つに折りたたむと、スッと勢いよく立ち上がった。

「あの、その……」

きょとんとしたままの紅深に言うことは決まっているはずなのだ、顔を見てしまうとどうにも言いにくい。

紅深は綺月に言いたいことがあるのを察して、待ってくれている。

つまりまた、静かな室内。そしてまた。

——ブーン、ブーン……

綺月が出るつもりがなく、電話機を握ったままでいると、紅深が気に掛けてしまった。

「電話、鳴ってますよ……?」

「はい、わかってますけど……」

「私のことは気にせず、出てください」

もちろん紅深との話を優先させるためになかった綺月ではあるが、そもそも出たくもないのだ。しかし、紅深に言われてしまつてはやむを得ない。

「何?」

紅深の前では不機嫌にもなりきれず、事務的な対応で電話に出ると。

相変わらずの晴れやかさで告げられたのは、意外な誘いだつた。

「紅深先輩と帰って来なよ。一緒にご飯食べよっ」

まんまと桐子の術中に落ちたと見るべきところであろうか。しかし、別れの挨拶を先送りできることに、綺月は素直に喜んでしまった。

§

「綺月ちゃんが先に彼女を連れてくるなんてね」

みなでの夕食が終わり、片付けも終わった食卓。

桐子の母親である楓が、向かいに座る綺月と話している。

「か、彼女だなんて……」

紅深は帰り、桐子はお風呂。今ここにいるのは、二人だけ。

楓には絶好のチャンスだ。もう一人の愛娘とも言える綺月を、彼女なりに可愛がっている。

「あら、まだ違うの?」

「えっと、うん、まだ……」

桐子の家に帰ってみれば、迎えに出たのは楓だつた。そのときから綺月は、あとで何か言われるだろうと覚悟はしていたつもりだが、実際に言われると予想以上に気恥ずかしい。

「じゃあ、がんばらなくちゃね。素敵な子だったもの、早くしないと取られちゃうぞ?」

「うん……」

楓は綺月の消え入りそうな返事に心躍らせ微笑んでいたが、すぐさま頭痛に襲われた。なぜなら、愛娘が現れたから。

「綺月いー、ママあー、お風呂上がったよー」

バスタオル一枚巻いて部屋に飛び込んできた桐子を見て、楓はついつい溜息をつく。

「はあ、桐子ちゃんの恋は、当分なさそうねえ」

「えっ? どしたの?」

「なんでもないわ……。綺月ちゃん、先に入っちゃって」

楓の提案に、綺月はこくんと返事をする。立ち上がると椅子を整え、少し早足で桐子の隣を抜けて部屋から出て行った。

「綺月、どうかしたの?」

「女の子にしかわからない悩みよ」

「……私は?」

状況が飲み込めないまま、桐子は少し納得がいかないような、むしろ納得がいくような気持ちでいた。

一方、駅で二人と別れて電車に乗った紅深の目の前には、意外な姿があった。

「済みません」

視界に彼を捉えたと同時に、紅深は笑顔を取りやめ、ゆっくりと隣に座る。

帰宅ラッシュは一段落し、終電までもまだ間のある電車内。空席がちらほら見られる。

「何かありましたか」

「はい、思わしくない事態です」

いつかも電車の中で隣り合った、がたいのいい男だ。

今日も穏やかな話しぶりで、紅深に用件を伝え出した。

「神殺しが組織されます」

「……私か」

「これまでの状況を踏まえれば、紅深も狙いだと考えるのが妥当でしょう」

互いに正面を見て、無表情のままに会話を続けている。

殺しだ狙いだと若干物騒ではあったが、周りは誰も気にしたりしない。

「動くのはいつですか」

「わかりません。少なくとも明日から三日間はありません」

「どういうことですか」

テンポのよい会話が、途切れる。

紅深が不意に横を向きそうになったとき、その理由が返ってきた。

「……私の隊員にも、指名がありました」

「なるほど。しばらくはお会いできませんね」

直接ではないにしろ、戦うべき相手だ。互いの手の内を曝す会話など、当然許されまい。

紅深は当然の判断をすると、あっさりと席を立った。しかし彼女の表情は、わずかに歪んでいた。

その表情を察してか、男は若干強めた調子で、彼女の背中に言った。

「迷うな、自分を信じろ。私もそう教育しています」

「そうですね。私には、迷いなどありません」

くるりと振り返った彼女は不思議と明るく、停車した駅で降りていく。

再び走り出した電車の中、残された男は頭を抱えた。

「申し訳もございません。私は、迷っています……」

§

「……何やってんの？ あれ」

「俺、音楽室の掃除、もう一回してこようかな……」

二人の戻ってきた教室には、異様な熱気が満ちている。

そんな教室の入り口横で状況を傍観していた近衛律子このえりっ子が、桐子の目に入った。

「ああ、ちょうどいいわ。律子、これ、何？」

「俗に言うポッキーゲーム？」

「いや、そりゃ見りゃわかるんだけどさ……」

窓際に結構な数の女子生徒が集まって、その中心では「見りゃわかる」ことがなされていた。

女子同士のじゃれ合いに、男子生徒は博徳と同様の反応を示

している。やはり異常に見えるのだろうか。

「近寄りたくないな、あれ」

「私も、ちょっと……。そもそものことで、あんなことになったわけ？」

「さあ？ 掃除から戻ってきたら、あんなってたし。アニメかなにかに感化されたらしいけど」

仕方なしに三人並んで終わるのを待とうと様子を見ていたが、突如、興味を持って観察せざるを得なくなった。

「おいおい、昨日に引き続きこの組み合わせかよ」

「うちのクラスのアイドル二人だからねえ」

輪の中心に見えたのは、ちょこんと頭の出る長身と、ちょこんとオレンジ色が見えるリボン。綺月とエクレアだ。

「昨日思ったんだけど、エクレアって穂積くんじゃなくて、本当に綺月狙いだったりするのかも？ 私には極めて好都合なんだけども」

「変なところでアピールするな」

「えーっ、私は穂積くんとなら、ポッキー食べたくなっ♡」

「断固拒否」

「私も食べて欲しいなっ♡」

「食べたくないから……」

律子と博徳が掛け合う横で、珍しく紅深は口を噤んでいる。

（そうそう女の子が好きなのがあるものなの？ まさか昨日のでバレた……？）

そして険しい表情の向く先では、着々と事が進んでいる。

「やっぱりねー、いくら嫌がっても、お子様綺月じゃ唆されちゃうのよねえ」

「桐子、ぼーっとしてないで止めて来いよ。あれはさすがにヤバいだよ」

桐子は博徳に声を掛けられふと、視界に意識を戻すと、確かにまずいことになっている。

残っていたポッキーの片端も咥えられてしまう。

「そうね。あれはさすがに行き過ぎ——」

彼女が一步踏み出そうとしたときだった。

「あの一、綺月さんは……？」

ひょこつと顔を見せたのは、紅深。

間が悪いとはこのことだ。最悪の事態に、桐子と博徳はしまったと歯噛みする。

「ホームルーム、まだでしたか」

放課前であることを察した紅深は、顔を出しただけで教室に入ることを控えた。

しかし、真つ正面には件の状況が存在するのだ。もはや気付かれるのも時間の問題だろう。

「……？ 今日のみなさん、何をしてらっしゃるのですか？」

彼女の問う声で、窓際の一団も紅深の存在に気付き出した。

——サーッ……

まるでそんな音がするかのようには静まり、綺月とエクレアへの道が開いた。

（最悪……）

今まさに踏み出さんとしていた桐子は、小さな溜息とともに前傾姿勢を解除する。

もはや言い訳は許されず、慌てることもできない状況だ。

「二人は仲良しなのですね……」

紅深の口調は穏やかで、いつも通りだった。特に変わった感じはない。

しかし、その場にいた全員が、彼女の気持ちを確信していた。嫉妬と呼ばれる類の、強く色濃い感情が伴っているだろうと。

(今日のはやりすぎなんじゃない……?)

(ごめん、佐川さん……)

(さすがのお姉様も怒るでしょ……)

昨日と似た状況ながら、空気は全く異なる。どうにも、重たい。さらにはもう一つ、異なることが起きた。

——ツカツカツカ……

エクレアが動いた。

エクレアは啞えていたものを離し、紅深の現れた出入り口へと真っ直ぐに歩き出す。

「あ——」

突然のことに口からポッキーを落とした綺月を、左手で引きずりながら。

もちろん、教室は広くない。わずか数秒で、目の前と言える距離で対峙する。

周囲が息を呑んだその瞬間、ためらいなく切り出したのはエクレアだった。

「笹原先輩は、綺月さんと付き合ってるんですか？」

——っ！

みな、あまりの直球ぶりにポカンとしてしまう。

綺月も同様に、狐につままれたようだ。

しかし、紅深の反応は落ち着いていた。

「いいえ。いわゆる恋人同士ではありません」

その声は意外にも、本当にいつも通りだと、周囲の多くが感じた。故に、みなの中の疑問符で占められた。

桐子も例外ではなく、エクレアの科白にも、紅深の反応にも、驚きを通り越し不思議を感じざるを得ない。

(えと、今日こそエクレアが紅深先輩に宣戦布告？ お姉様は余裕綽々？ あー、何か凄いよーなわからないよーな)

仕掛けたエクレア自身すら、意表を突かれた感を多少覗かせている。しかし彼女は色めくことなく、次の一言を放った。

「なら、私が綺月さんとキスしても、文句はありませんよね？」

「え——」

彼女の発言に、みなが驚き、声を漏らす。

しかし直後、驚かなかったものがたった一人いることが、明らかになる。

「はい」

「えっ？」

一人異なる反応をした紅深に対し、みなはまた驚く。

彼女も、驚き、戸惑った。

(紅深先輩、そんな、どうして……)

周囲のものは誰一人、綺月の顔を見ることができなかった。

あとがき

お久しぶりです。Fukutami です。

最近はお久しぶり」って言わなくてもいいのかなってペースで出しているのが、ちょっと嬉しくもあり、辛くもあります。だってだって、書くの大変なんだから。

この話も、終盤の生産性の低さと言ったら……。生産性が上がらない」と「集中力が上がらない」ってのはセットでして、ついつい余計なことをやってさらに生産性を下げてしまったり……。ま、長らく書いてれば私も気付けば十年選手だからねえ）そーゆー壁も越えないとねとがんばってみました。

がんばったと言えば、これを執筆中、腱鞘炎になってしまいました。右手人差し指が痛くて箸も使えない状況に……。幸い、愛用の某キーボードに救われ、執筆への影響は最小限に抑えられましたけど。ちなみに首と肩は相変わらず。左膝は二度もぶつけて凄く痛い。さらに転んで左手首を軽く痛め。とんでもない身体になっちゃいます……。

さて、ついに第三巻ですよ。予定では最終巻ですよ。終わってませんよ。いやあ、二巻までで派手に散らかしたバカがいるんで、お片付けの準備が必要となり全四巻となりましたとさ。予定よりも半年遅れのリリースってのも、お片付け準備の重さ故……でもなく、四半期分は読みの甘さでした。ごめんなさい。

半年も経つといろいろ反省することもありまして、第一、二巻

と文章の調子がだいぶ違っちゃってます。引き継ぐこともできなかったんですが、悪いところばかり見えちゃったんで、直しちゃえと。紅深がだいぶ可愛くなっちゃったかもってのとあわせて、まるで別の作品だなんて突っ込みを自らしたくもなるのですが。許してやってください。

とゆわけで今回は紅深ばっか書いていたんですが、どうですかね？ 紅深って好き？ 立場によって意見の分かれるところでしようが、恋人としては結構きついいところあるかなって思っちゃったりはします。秘密があるのってダメね、あたし。秘密があることすら気付かせてくれないんだけど、そうはいかないことが大抵ですからねえ。そんなとき、自分に都合悪く考えて、落ち込んじゃったりすると思います。

ロリな私の好みはさておき、そろそろ次回予告。

『恋果て止めて』の最終巻は、年内を目指したいと思っています。が、実績を踏まえると、んー、難しいのかなあ。来年二月って言うっておく方が無難かなって感じで受け取ってください。

私の次の作品は、今月末の「杜の奇跡14」で、合同コピー誌の中の一作品としてリリース予定です。仙台まで遊びに来てね(笑)

二〇〇九年五月、書くべきものに押しつぶされながら。

恋果て止めて (3)

Fukapon

2009年5月5日 初版発行

発行所 まにふいくみやはか
印刷／製本 株式会社アクセア
project KAIGO

Copyright © 2009 Fukapon <fukapon@projectkaigo.org>
<http://www.projectkaigo.org/>

